

六月二八日

今朝の院のレクチャーは岡山県建部町国際交流館の設計について。伊豆の長八美術館高崎第七官界建部町に共通して通じる考え方に關して述べる。始まりは佐渡の宿根木である。北前船に體現していた技術がコトの始まりなのを伝えたい。

朝ゲートルはようようの思いでナポリを去った。本当に彼は誠実な男であった。しかし学びたいけれど学びようが無い。ゲートルのシリアの旅に同行した画家クニープのその後はどうなったのだろうか。ゲートルのイタリア紀行に名をとどめるに終ったのか、それだけでも彼は運が良かったのかもしれないが。

佐藤健から電話があつて、今夕自分の位牌を見せに世田谷に来るといふ。そして、寿司はいいからソバを喰わせるといふ。ゲートルんぬんどころじゃないよ。

午後GA杉田君来室。楽しいおしゃべりをして帰った。GAJAPAN星の子愛児園発表。まあ、こんなもんだらう。次へ進むぞ。十八時世田谷村地下へ佐藤健自らの位牌をもって現れる。自業自得大明王。こんな戒名は日本で初めてである。と淡々として述べて、説教するでもなく、何でもなく、宗柳でソバを喰べて帰った。覚悟が決まったんだと考えた。今のところ淡々として平安であると言っていた。俺にはとても想像も出来ぬ境地だな。

六月二九日 土曜日

昨夜の件を思い出してみる。良い一日であつたと思う。昨夜があつたからこそ、良い一ヶ月になり、良い一年で、良い十年になつた。健さんが淡々として死と対面できるようになつた平安が光つた夜であつた。第二ハードルは超えたところのある種の自信と達成感がそう言わせている。第五ハードルくらいまで来ると予感してるとも言っていたな。肝臓ガンの手術後の痛さは想像を絶していたとも言っていた。焼け切つたフライパンを背中押し当てられたようなものらしい。痛さで泣くことがあるのを知つたと言っていたな。東大病院の放射線科の病室の話にも興味深かつた。厚さ六〇センチメートルくらいのコンクリート打放しで放射線を当て始めると、健を一人台上に残し、パタパタと全員が室外に去るのだと。その際のアツケラかんとしたセキリヨウ感を彼は良く表現していた。ヒットラーの地下ゴアのコンクリートはもっと厚かつたらしいが。六週間放射線をマキシマムに食道ガンの中枢に当て続けたのだ。体にマーキングされてその一点に射撃されたのだ。俺は原爆の子だと、笑っていた。夕陽のガンマンから原爆の子へ、ようするに健は解脱を成し遂げたのだ。私はそんな彼をマジマジと視ていた。顔で笑つて心で泣いてなんて感じ、ちゃんちゃらおかしい感じはこえて、マジマジと視て、聴いていた。

究極の家、つまり彼の墓をデザインする。その一部始終を記録して残す。今日から始める。